

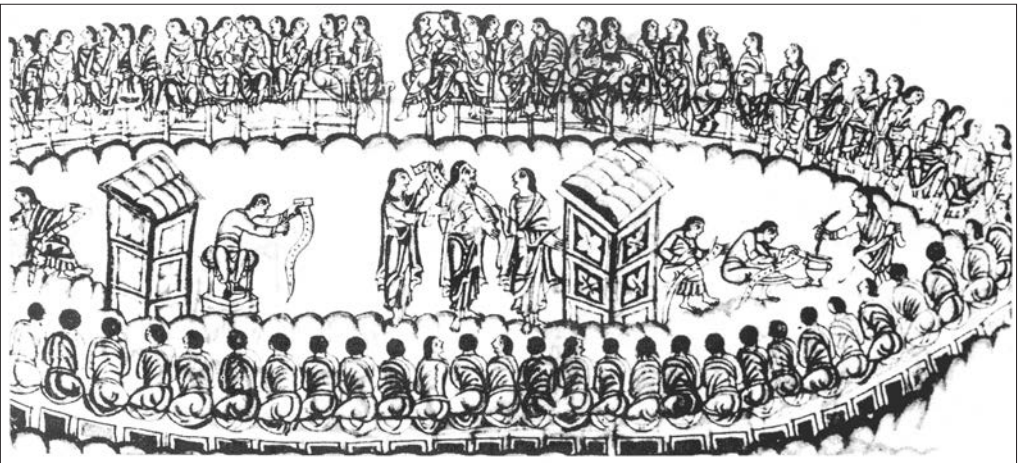
日本中世英語英文学会 第39回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2023年12月2日（土）・12月3日（日）

所：早稲田大学（早稲田キャンパス）

The 39th Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
2-3 December 2023
Waseda University (Waseda Campus)



日本中世英語英文学会

目 次

会長挨拶	3
会場案内	4
会場までのアクセス	5
早稲田大学詳細図	6
会場見取り図	7
プログラム 第1日 12月2日(土)	9
第2日 12月3日(日)	10
Programme Saturday 2 December	12
Sunday 3 December	13
発表要旨 第1日 12月2日(土) 研究発表Ⅰ	15
研究発表Ⅱ	16
第2日 12月3日(日) 研究発表Ⅲ	18

11月13日(月) [必着] までに、申し込みフォーム：
<https://forms.gle/7Xk3g5ds6upti1JFA> (学会 ML 経由推奨)，
あるいは同封の葉書でご出欠をお知らせください。

*出張証明書が必要な方は、その旨をご記入ください。

大会準備委員

平山直樹 (委員長) 藤井香子 (副委員長)
小笠原清香 岡田 晃 岡崎久美子 井口 篤 渡辺直子

開催校委員

新川清治

事務局

〒175-8571 東京都板橋区高島平1丁目9-1
大東文化大学文学部 英米文学科 小池剛史研究室内
連絡先：jsmes.2023.2024@gmail.com

会長挨拶

会員の皆様

第39回全国大会にようこそ！コロナ禍により過去3回の全国大会はウェブ・カンファレンス方式でしたが、今回は開催校の新川先生のご尽力により、早稲田大学を会場としてコロナ禍以後、初の対面集会方式での全国大会開催の運びとなりました。また9件の研究発表に加えて懇親会も復活することになり、より充実した大会となることと思います。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

ご多忙の中、今回の大会プログラムの作成と大会実施に、ご尽力くださった平山委員長をはじめとする大会準備委員の先生方、平日週末昼夜を問わず精力的に仕事をして下さった小池事務局長、いつも有益な助言をくださった家入副会長、そして、継続して今年も技術面を強力にサポートして下さいました柳先生に衷心より御礼申し上げます。

それでは早稲田の杜でお会いしましょう。

2023年10月吉日

日本中世英語英文学会

会長 鈴木 敬了

会場案内

1. 受付は、12月2日(土)11:30～16:00および12月3日(日)9:30～10:50に、3号館 4F 401教室前にて行われます。(※ 受付では、一般会員の年会費徴収は行いません。)
2. 当日会員会費は、一般1,000円、学生・定年退職者500円です。
3. ハンドアウトは、各発表会場で配布します。
4. 大会本部は、3号館 6F 606演習室です。
5. 会員控室は、3号館 4F 406教室です。12月2日(土) 11:30頃からご利用いただけます。
6. 司会者・発表者控室は、3号館 6F 607演習室です。
7. 書店展示は、3号館 2F 201教室にて行われます。
8. ポスターセッションは、12月2日(土) 12:00～13:00および3日(日) 9:00～10:00に、書店展示と同じ、3号館 2F 201教室にて行われます。
9. 懇親会は、12月2日(土) 18:00から高田馬場駅から徒歩3分のCafé Cotton Club (<https://www.cafecottonclub.com/info/>) B1Fにて行われます。懇親会費(一般 5,000円、学生 3,000円)は、当日受付でお支払いください。
10. ご来場は公共交通機関をご利用いただき、車でのご来場はご遠慮ください。
11. キャンパス内は指定屋外喫煙場所以外、全面的に禁煙です。喫煙は屋外喫煙場所の区画内をお願いします。
12. キャンパス内の食堂、および3号館1Fのセブンイレブンは日曜休業です(コンビニや食堂は大学周辺に多数あります)。
13. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っていません。

連絡先

早稲田大学(早稲田キャンパス)

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1

(大会本部: 3号館 6F 606教室)

開催校連絡先: seiji.shinkawa@waseda.jp

会場までのアクセス



(電子版『早稲田大学 学部入学案内2024』より一部転載)

【東京駅から】

JR 山手線・西武鉄道西武新宿線 高田馬場駅から徒歩20分

都バス 学02 高田馬場駅—早大正門

東京メトロ東西線 早稲田駅から徒歩5分

東京メトロ副都心線 西早稲田駅から徒歩17分

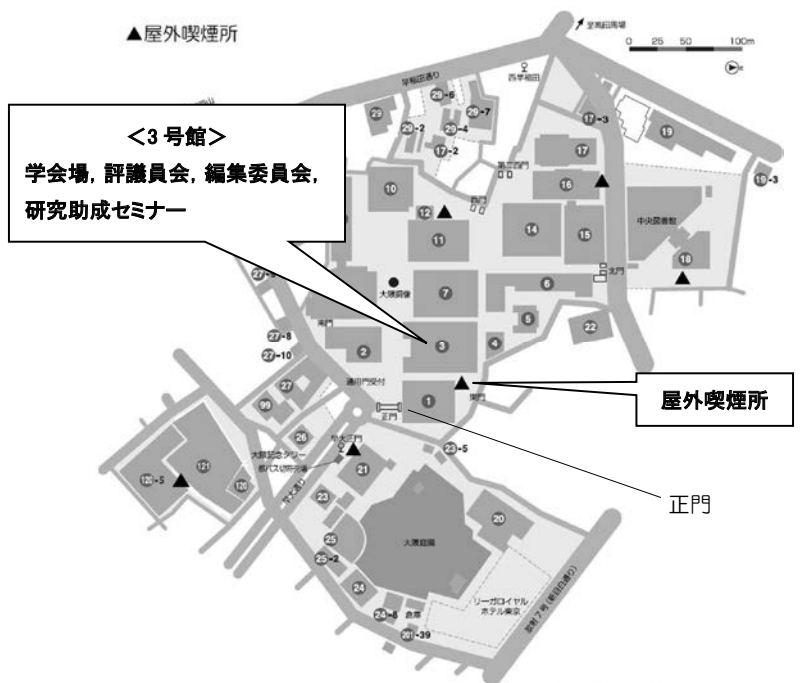
東京さくらトラム (都電荒川線) 早稲田駅から徒歩5分

【羽田空港から】(一例)

京急空港線 日本橋駅下車, 東京メトロ東西線 早稲田駅から徒歩5分

(延べ約1時間)

早稲田大学（早稲田キャンパス）詳細図



(早稲田大学 HP より一部転載)

学会場詳細案内

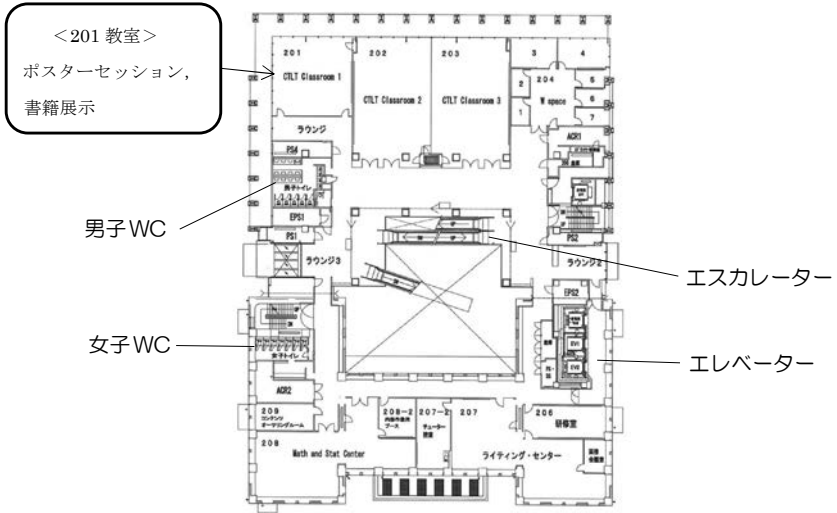
3号館

2F	ポスターセッション, 書籍展示	201教室
4F	受付	401教室前
	開会式・総会	401教室
	会長講演・研究発表Ⅰ・研究発表Ⅲ	
	閉会式	402教室
	研究発表Ⅱ	
	評議員会	
	会員控室	406教室
6F	大会本部, 大会準備委員会控室, 開催校準備委員控室, 研究助成セミナー (大会後)	606演習室
	司会者・発表者控室	607演習室
	編集委員会 (大会前日)	609演習室

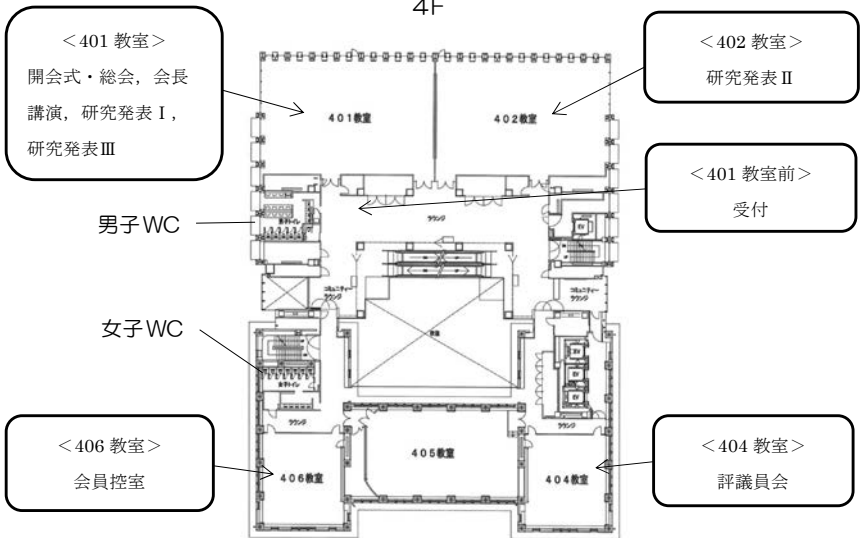
会場見取り図

【3号館レイアウト】

2F



4F



日本中世英語英文学会 第39回全国大会プログラム

2023年12月2日(土)・12月3日(日)

早稲田大学(早稲田キャンパス)

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1

(大会本部: 3号館 6F 606演習室)

開催校連絡先: seiji.shinkawa@waseda.jp

第1日 12月2日(土)

11:30~16:00 受付(3号館 4F 401教室前)

*会員控室(3号館 4F 406教室)

12:00~13:00 ポスターセッション(3号館 2F 201教室)

13:00~13:30 開会式・総会(3号館 4F 401教室)

開会の言葉
司会 小池剛史(大東文化大学)
議長 鈴木敬了(大東文化大学)

事務局報告 事務局長 小池剛史(大東文化大学)
編集委員会報告 編集委員長 狩野晃一(明治大学)
大会準備委員会報告 大会準備委員長 平山直樹(尾道市立大学)
大会案内 開催校委員 新川清治(早稲田大学)

13:45~14:45 会長講演(3号館 4F 401教室)

司会 石黒太郎(明治大学)

MV/VM Order in *Beowulf* 再考

—Alliteration, Scope および Extra elements の相互作用

会長 鈴木敬了(大東文化大学)

15:00~17:20 研究発表 I(3号館 4F 401教室)

15:00~15:40 司会 佐藤桐子(大東文化大学)

1. Infinitive or *That*-clause? 古英語福音書における統語的選択

小倉美知子(千葉大学名誉教授)

15:50~16:30 司会 和田 忍 (駿河台大学)

2. 後期古英語期の聖職者ウルフスタンのリズム：その特徴と通時的变化
小河 舜 (清泉女子大学非常勤講師)

16:40~17:20 司会 辺見葉子 (慶応義塾大学)

3. J. R. R. トールキンによる古英詩『モールドンの戦い』解釈と
現代英語訳に見られる群像劇的ヒロイズム
伊藤 尽 (信州大学)

15:00~17:20 研究発表Ⅱ (3号館 4F 402教室)

15:00~15:40 司会 三浦あゆみ (東京大学)

4. 中英語聖書におけるラテン語接続法の表出形態について
佐藤信正 (独立研究者)

15:50~16:30 司会 松田隆美 (慶応義塾大学)

5. 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』における俗語典拠の使用
狩野晃一 (明治大学)

16:40~17:20 司会 多ヶ谷有子 (関東学院大学)

6. 後期中世平信徒の信仰実践における寓意的女子修道院の利用
—Robert Thornton の能動的読書と *Abbey of the Holy Ghost* への註—
杉山ゆき (ヨーク大学大学院・
明治大学兼任講師)

18:00~20:00 懇親会 (Café Cotton Club)

第2日 12月3日(日)

9:00~10:00 ポスターセッション (3号館 2F 201教室)

9:30~10:50 受付 (3号館 4F 401教室前)

*会員控室 (3号館 4F 406教室)

10:00~12:20 研究発表Ⅲ (3号館 4F 401教室)

10:00~10:40 司会 唐澤一友 (立教大学)

7. Knowing Oceans: Tides, Shallows, and Texts

Britton Brooks (九州大学)

10:50~11:30 司会 宅間雅哉 (東京未来大学)

8. *Peterborough Chronicle* における視点と焦点の変化：名前と肩書の
同格表現に付加される地名要素から探る

新川清治 (早稲田大学)

11:40~12:20 司会 片見彰夫 (青山学院大学)

9. 英語史授業の実際を振り返る—直接・間接の歴史教材の使い方

守屋靖代 (国際基督教大学)

12:20~12:30 閉会式 (3号館 4F 401教室)

閉会の言葉

副会長 家入葉子 (京都大学)

PROGRAMME

SATURDAY 2 DECEMBER

11:30~16:00 Registration (Entrance of Lecture Room 401, 4F, Building No. 3)
*Members' Waiting Room (Lecture Room 406, 4F, Building No. 3)

12:00~13:00 Poster Session (Lecture Room 201, 2F, Building No. 3)

13:00~13:30 Plenary Session (Lecture Room 401, 4F, Building No. 3)
President: KOIKE, Takeshi, Daito Bunka University

Opening Address

SUZUKI, Hironori

President of JSMES, Daito Bunka University

Business Announcements

13:45~14:45 Inaugural Lecture (Lecture Room 401, 4F, Building No. 3)

President: ISHIGURO, Taro, Meiji University

MV/VM Order in *Beowulf* Reconsidered: The Interplay between Alliteration, Scope, and Extra Elements

SUZUKI, Hironori, President of JSMES, Daito Bunka University

15:00~17:20 Paper Session I (Lecture Room 401, 4F, Building No. 3)

15:00~15:40 President: SATO, Kiriko, Daito Bunka University

1. Infinitive or *That*-clause? Syntactic Choices in Old English Versions of the Gospels

OGURA, Michiko, Professor Emeritus, Chiba University

15:50~16:30 President: WADA, Shinobu, Surugadai University

2. Wulfstan's Rhythm: Its Characteristics and Transition

OGAWA, Shun, Part-time lecturer at Seisen University

16:40~17:20 President: HEMMI, Yoko, Keio University

3. J. R. R. Tolkien's View on the Loyal Lot of Heroism in His Interpretation and Modern English Translation of Old English Epic *The Battle of Maldon*

ITO, Tsukusu, Shinshu University

15:00~17:20 Paper Session II (Lecture Room 402, 4F, Building No. 3)

15:00~15:40 Presider: MIURA, Ayumi, The University of Tokyo

4. On the Expression of the Latin Subjunctive in the Middle English Bible
SATO, Nobumasa, Independent Scholar

15:50~16:30 Presider: MATSUDA, Takami, Keio University

5. The Use of Earlier Vernacular Sources in *The Robert of Gloucester's Chronicle*: its Process, Purpose, and Value
KANO, Koichi, Meiji University

16:40~17:20 Presider: TAGAYA, Yuko, Kanto Gakuin University

6. Translating the Allegorical Nunnery into A Late-Medieval Lay Household: Robert Thornton's Practice of Devotional Reading and the *Abbey of the Holy Ghost*
SUGIYAMA, Yuki, PhD research student at University of York / Part-time lecturer at Meiji University

18:00~20:00 Reception (Café Cotton Club)

SUNDAY 3 DECEMBER

9:00~10:00 Poster Session (Lecture Room 201, 2F, Building No. 3)

9:30~10:50 Registration (Entrance of Lecture Room 401, 4F, Building No. 3)

*Members' Waiting Room (Lecture Room 406, 4F, Building No. 3)

10:00~12:20 Paper Session III (Lecture Room 401, 4F, Building No. 3)

10:00~10:40 Presider: KARASAWA, Kazutomo, Rikkyo University

7. Knowing Oceans: Tides, Shallows, and Texts
BROOKS, Britton, Kyushu University

10:50~11:30 Presider: TAKUMA, Masaya, Tokyo Future University

8. Changes of Perspective and Focus in the *Peterborough Chronicle*: As Reflected in the Use and Distribution of Place Elements Modifying Titles Paired in Apposition with Personal Names

SHINKAWA, Seiji, Waseda University

11:40~12:20 Presider: KATAMI, Akio, Aoyama Gakuin University

9. Incorporating Historical Studies of the English Language into Course Materials

MORIYA, Yasuyo, International Christian University

12:20~12:30 Closing Address (Lecture Room 401, 4F, Building No. 3)

IYEIRI, Yoko, Vice-President of JSMES, Kyoto University

発表要旨

第1日 12月2日(土)

15:00~17:20 研究発表 I (3号館 4F 401教室)

15:00~15:40 司会 佐藤桐子 (大東文化大学)

1. Infinitive or That-clause? 古英語福音書における統語的選択

小倉美知子 (千葉大学名誉教授)

Old English では infinitive よりは *that*-clause の方が構文としてより多く用いられており、それがゲルマン語以来の性質を反映していると捉えられている。しかし、どちらの構文も OE 初期から用いられており、どちらがより通常の Old English として使われていたか決めなければ、頻度のみならず行間注釈書でラテン語の訳として用いていたかという尺度が必要になる。本発表では、古英語福音書の Lindisfarne, Rushworth と West Saxon version を用いて、ラテン語 *ut*, *ne*, infinitive の訳を行間注釈と free translation で比較し、West Saxon でごく普通に用いられていた *þæt*-clause, (*to*)-infinitive 構文, *man*-periphrasis が、行間注釈の中にも見られた事例を挙げ、infinitive 構文の頻度が低いとされていたのは、行間注釈を綿密に調べてこなかっただけと結論したい。

15:50~16:30 司会 和田 忍 (駿河台大学)

2. 後期古英語期の聖職者ウルフスタンのリズム：その特徴と通時的变化

小河 舜 (清泉女子大学非常勤講師)

後期古英語期の聖職者ウルフスタン (d. 1023) の説教作品には、古英語の他作品や他作家とは異なる特徴的な文のリズムが見られる。McIntosh (1949) が指摘したように、そのリズムは、原則として統語的なまとまりを成す “two stress phrases” によって構成され、ウルフスタン作品を断定する上でも重要な手がかりとして利用されてきた。しかし、Funke (1962) が指摘するように、ウルフスタンの文体は、実際には two stress phrases を基盤としながらも、より多様なリズムを示している。ウルフスタンの説教が、作成された時期によって異なる主題や言語的特徴を示すことを考慮すれば、ウルフスタンのリズムにキャリアを通した一貫した変化が見られることも考えられる。本発表では、ウ

ルフスタンによって異なる時期に作成された説教作品のリズムを通時的に分析・比較することで、文脈や使用する語（句）とリズムとの関連を提示するとともに、ウルフスタンのリズムに見られる通時的な変化について考察を行う。

16:40~17:20 司会 辺見葉子（慶応義塾大学）

3. J. R. R. トールキンによる古英詩『モールドンの戦い』解釈と現代英語訳に見られる群像劇的ヒロイズム

伊藤 尽（信州大学）

本発表では、J. R. R. Tolkien による古英語英雄叙事詩 *The Battle of Maldon*（以下 *Maldon*）の未発表現代英語訳と ‘The Homecoming of Beorhtnoth Beorhthelm’s Son’ 草稿に基づき、*Maldon* に謳われる英雄像はベオルフトノスの死後も戦い続けた近従たちこそ見出されると主張する。また、*Maldon* が伝統的な英雄叙事詩の形式を借りた新しい heroism を示すという解釈を提示する。

Maldon はイングランドを北歐人から護ろうとして戦死した武将ベオルフトノスの英雄行為を讃える叙事詩と見なされた。しかし、英雄たるべきベオルフトノスに批判的な目を向けた Tolkien (1953) によって賛否両論が交わされた。しかし Tolkien の未発表草稿から見えてくるのは、欠点の有無に拘わらず主君を敬慕した家臣達の英雄的行為だった。*Maldon* を、10世紀末に新たに焦点を当てられた忠臣たちへの叙事詩とみなす視座を紹介する。

15:00~17:20 研究発表Ⅱ（3号館 4F 402教室）

15:00~15:40 司会 三浦あゆみ（東京大学）

4. 中英語聖書におけるラテン語接続法の表出形態について

佐藤信正（独立研究者）

本研究は、ラテン語『ウルガタ』の接続法表現が中英語聖書にどのように翻訳されたかを調査し、中英語話者の接続法意識を探るものである。従来、中英語聖書はその語順や語彙の視点からラテン語の逐語訳とみなされてきたが、これを文法意識の視点から再考察するため、ラテン語接続法の機能ごとに英訳対応を調査した。全体傾向としては、組織的に、ラテン語接続法現在には中英語の接続法現在が充てられ、ラテン語接続法未完了過去には法助動詞 *should* の迂言表現が充てられ、いわば文法的相補分布を形成していた。このことは、*should* がその原義から派生する意味によって充てられたのではなく、接続法

という文法意識の表現であったことを示している。また、ラテン語接続法の個別機能としては、主文用法、時間副詞節、条件節、ラテン語の一般的な従属節である *ut* 節、関係節をそれぞれ調査し、表出特性を探った。

15:50~16:30 司会 松田隆美（慶応義塾大学）

5. 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』における俗語典拠の使用

狩野晃一（明治大学）

『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』は多くの典拠を用いて書かれた初期中英語期の韻文年代記である。発表者はかつて当該年代記の冒頭部分について、その典拠と考えられる諸ラテン語年代記がいかにして年代記に翻訳され、韻律を整えて組み込まれたかを中心に研究発表を行った。当該年代記の典拠作品調査によれば、ジェフリー・オヴ・モンマス『ブリタニア列王史』やヘンリー・オヴ・ハンティントン『イングランド人の歴史』などラテン語による年代記や編年史のみならず、初期の俗語で書かれた年代記すなわち『アングロ・サクソン年代記』やラハモン『ブルート』も歴史記述の典拠となっている。ラテン語からの翻訳という作業と、同じ言語だが古い時代の英語からの引用や古語の翻訳を含む作業は、この年代記にいかなる影響を与えているのであろうか。

本発表では、語彙の翻訳、記述内容の反映、典拠原文からの統語等への影響などに焦点をあて、初期の俗語典拠が『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』にいかに関与しているのか、その一端を詳細な比較を通して明らかにすることを第一の目的とし、さらにラテン語典拠からの翻訳や記述の反映のプロセスと対比させることで、典拠の言語の差がこの初期中英語年代記の記述にいかに関与しているのか検証を試みる。

16:40~17:20 司会 多ヶ谷有子（関東学院大学）

6. 後期中世平信徒の信仰実践における寓意的女子修道院の利用 —Robert Thorntonの能動的読書と*Abbey of the Holy Ghost*への註—

杉山ゆき（ヨーク大学大学院・明治大学兼任講師）

本発表は15世紀イングランド、北ヨークシャーの地主である Robert Thornton により作られたリンカン・ソントン写本 (Lincoln, Cathedral Library, MS 91) 中の中英語版 *Abbey of the Holy Ghost* (*Abbey*) を、Richard Rolle に帰されたテキストとともに考察する。Thornton は基礎教理についての

宗教テキストに加え、神秘体験や瞑想に関するテキストを彼の信仰実践を指導した聖職者とともに読んでいた。Abbey は読者の魂を女子修道院に例える建築の寓意を用い、古仏語原典に比べ、神秘体験についての記述が減り平信徒の信仰実践に対し保守的だと従来捉えられてきた。本発表では、リンカン写本に残る Thornton による Abbey への註に着目し、Abbey が、訓練された読者であった Thornton にとって、Rolle 的な靈的喜びへのレファレンスとして機能したことを指摘する。そして、‘female devotion’ に結び付けられた Abbey の女子修道院の寓意空間が、Rolle のような隠者と結び付けられた荒野同様に、男性読者である Thornton にとって、靈的完成を目指すのに相応しい場所として想像された可能性を示す。

第2日 12月1日(日)

10:00~12:20 研究発表Ⅲ (3号館 4F 401教室)

10:00~10:40 司会 唐澤一友 (立教大学)

7. Knowing Oceans: Tides, Shallows, and Texts

Britton Brooks (九州大学)

This paper, representing the first fruits of the *Knowing Oceans* project, will demonstrate how an interdisciplinary examination of human interaction with the oceans/seas can offer fresh insights, specifically by examining the ways early medieval peoples engaged with the tidal shores of the British and Irish Archipelago. It will argue that such interactions both shaped and were shaped by their literary expressions. The paper will do so via two interconnected strands: first, it will examine a variety of texts in Old English, Anglo-Latin, Hiberno-Latin, and Old Irish which focused on the physical, theological, and philosophical delineations of ocean tides, including the Irish *Hisperica Famina*, Bede's *Historia Ecclesiastica* and *De natura rerum*, and Simeon of Durham's *Libellus de exordio*; second, it will explore the use of tidal resources like oysters and seaweed, particularly in texts like the Old English Riddles 74 and 58, and compare them with the Anglo-Latin tradition, as exemplified in Aldhelm's *Enigmata*. This study will argue, ultimately, that only by examining such traditions wholistically and collectively can we gain a clearer understanding of the relationship between early medieval peoples and the oceans/seas.

10:50-11:30 司会 宅間雅哉 (東京未来大学)

8. Peterborough Chronicle における視点と焦点の変化：名前と肩書の同格表現に付加される地名要素から探る

新川清治 (早稲田大学)

Anglo-Saxon Chronicle は9世紀末に恐らく Wessex で過去1000年に渡る国家的出来事の記録としてまとめられ、その後、複数の教会・修道院で各年の出来事がほぼ同時代に書き継がれた極めて重要な通時言語資料であり、その主要な写本の一つである *Peterborough Chronicle* においては1154年までの記録が残っている。中央から断続的に項目の追加があったようだが、年代記編纂が継続された各地において独自の発達が認められる。こうした過去から同時代、国から地域への視点と焦点の変化は、例えば Alfred をただ king と呼ぶか king of Wessex と呼ぶかの選択にも影響を与えている。本発表では *Peterborough Chronicle* と他の主要な写本を比較した上で年代記作成における共通の文体を想定し、その伝統において記録者の視点や焦点の変化が同格表現にどのように反映されているかを辿る。

11:40-12:20 司会 片見彰夫 (青山学院大学)

9. 英語史授業の実際を振り返る—直接・間接の歴史教材の使い方

守屋靖代 (国際基督教大学)

近年、家入(2016)や片見・川端・山本(2018), Hayes and Burkette, eds. (2017)らによる出版物や学会シンポジウムにおいて、教材としての英語史研究が注目されている。この発表では、直接間接に英語史のアプローチを取り入れた教材を活用し学生自身の主体的リサーチを導く方策を以下のトピックから一つの教材に絞って提案する。(1) 辞書やコーパス等の道具を知り語源と言語変化の動向を調べる (2) 現代英語の知識を活かしつつ英語史のリサーチへ発展させる (3) 社会言語学や語用論と絡ませて異分野での英語の使われ方を比較し、リサーチクエスチョンを立てて分析できるように、最終的には英語史の視点も取り入れた卒論や修論まで導く。ピアとの共同作業でモチベーションを高め、歴史研究を通して英語力が増した達成感をもたらす教材を紹介し、これからのティーチングへの提言も示唆することで、最近のシンポジウムで強調された「英語史研究をトリビアで終わらせない」ことへの応答を試みる。

朝日出版社

|| 審査用見本デジタル版 閲覧サービスのご案内 ||

朝日出版社では、従来どおり紙媒体での教科書見本に加えて、新たに「審査用見本デジタル版」閲覧サービスを開始いたしました。教科書をご審査いただくにあたって、時間と場所にとらわれず、さまざまな教科書の見本をパソコンでもスマートフォンでもご覧いただけるようになります。是非ご利用ください。

「審査用見本デジタル版」を閲覧いただくには、IDとパスワードでのログインが必要となります。ご登録用IDとパスワードの発行をご希望の際は、右記サイトよりご登録のお手続きをお願いいたします。

<https://text.asahipress.com/special/publuslite/>

朝日出版社 電子見本 検索



審査用見本デジタル版
トップページ



審査用見本デジタル版
見本例



お問い合わせは右記の朝日出版社英語テキスト課へお願いいたします。 朝日出版社英語テキスト課：text-e@asahipress.com

中世英文学の日に 一池上忠弘先生追悼論文集一

チョーサー研究会／狩野晃一 編 A5判／248頁／定価 3,080円 978-4-269-72156-2 中世英語英文学研究において多大な業績を残した池上先生に捧げる15の論文集。英語やそれによる文学だけでなく歴史や文化も広く知るべきという池上先生の言葉どおり、多様な視点を盛り込んだ論考群。

中世英国ロマンスへのいざない 一田尻雅士遺稿集一

金山亮太／藤井香子 編 A5判／256頁／定価 3,300円 978-4-269-72096-1

イギリス中世演劇の変容 一道德劇・インタルード研究一

宮川朝子 著 A5判／284頁／定価 3,300円 978-4-269-71000-4

中世ヨーロッパ物語集 Medieval Legends 小宮山博 著 三浦常司／今井

光規 編注 A5判／126頁／定価 2,090円 978-4-269-71000-4

英宝社

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-7-7

TEL：03-5833-5870 FAX：03-5833-5872

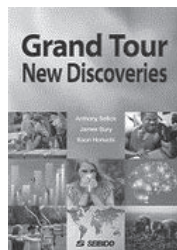
E@eihosha.co.jp <https://www.eihosha.co.jp/>

Grand Tour — New Discoveries

《新たな時代への冒険》

多様な話題から現代社会を読み解く上級リーディング教材

エッセイは 850 語程度の良質な 英文で精読に最適。スポーツマンシップの大切さや豚の心臓を移植した男性、そして教育の価値からアニメの多大なる影響力まで、幅広い話題で語彙力を高めると共にクリティカルシンキング力を養う内容となっている。教授用資料には各章の小テストとアクティビティを完備。



Anthony Sellick James Bury 堀内 香織 共著

■B5 判・136pp. ■ISBN978-4-7919-7293-7

■定価 2,200 円 (本体 2,000 円+税 10%)

(株)成美堂

101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22

TEL : 03-3291-2261 FAX : 03-3293-5490

BOYDELL & BREWER

シリーズ好評刊行継続中 (全 45 巻・特価にて入手可能)

Anglo-Norman Studies

The annual Anglo-Norman Studies has been a leading forum for work on the cross-Channel realm of England and Normandy for the past twenty-five years.

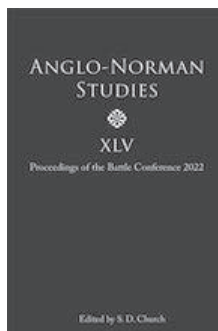
"A series which is a model of its kind": Edmund King

●最新刊

Anglo-Norman Studies XLV : Proceedings of the Battle Conference 2022

Edited by **Stephen D. Church**

2023 Sep. 292 p. ISBN 9781783277513 £80.00 本体概価 ¥17,600



* お問い合わせ ユーリカ・プレス (Tel 075-741-6631)

* 洋書取扱い各書店にてご注文承ります

